

■ Z世代は農業・地方暮らしに注目 社会の「やくにたつ」ことに価値を見いだす傾向

今回の調査結果を見ると、若い世代が特に地方暮らしや農業に注目していることが分かりますね。農業ジャーナリストとして携わっていると、この背景には二つのポイントがあるように感じます。

一つ目のポイントは地方暮らしというライフスタイルへの憧れです。経済が停滞している中で育った今の若い世代は、モノを所有することよりも「社会や誰かの役に立つこと」に価値を見いだす傾向があると感じます。その目が地域格差の解消にも向けられており、特に3.11以降、災害からの復興という面でその傾向が強くなった気がします。情報過多・効率主義な都市生活は、何かとストレスがたまりやすく生きづらいという指摘もありますが、田舎で「自然と向き合って作物を育てる」という目の前の課題に取り組むことで、スマホの中とは全く異なる人間関係や充足感が見いだせます。都会の1,000人が働くオフィスより、田舎の10人のコミュニティで過ごす方が、自分の存在意義や自己有用感が感じられるという人も増えているのではないのでしょうか。

■ ビジネスとしての可能性大で「ゆめがある」 参入しやすさ&将来性も人気の要因に

もう一つのポイントは、ビジネスとしての農業の可能性です。経済の視点から農業を見直す「アグリビジネス」という言葉をよく聞くようになりました。高齢化が進み農業人口の減少が続き、担い手不足が叫ばれていますが、それを逆手にとって新規参入するチャンスともいえます。今は実際の農地に加えて技術、経営管理のノウハウなどの経営資産を家族以外から継承できるシステムが整備されているため、新規就農者も参入しやすくなっています。また、地域や行政からの支援制度も手厚くなっているため、チャレンジしやすい環境が整っています。

■ 農業の「やりがい」は、“そだてる喜び”と“五感のフル活用”

今回の調査でも、農業は「やりがい」「役に立つ」「夢がある」と「3Y」のイメージで捉えられていました。かつての「3K」のイメージから脱却し、やりがいのある仕事と認識されつつあるようですね。私は家庭菜園をライフワークとしていますが、土にまいた種を育て、芽が出る喜びにやりがいを感じます。また、農作業で身体を動かしていると、心身ともに活性化します。見て、聞いて、触れて、味わって、嗅いで…と五感をフル活用する楽しさは、オフィスワークでは感じにくい、農業ならではの魅力です。全国各地の農家の方々取材する中でも改めて、こういった農業の魅力を実感しています。

■ イメージしにくいけれど、実は重要！「当事者意識」を持って農作業事故を防ごう

今回の調査では、農作業中の事故について、農業従事者と未経験者で意識が異なりました。天候不良や自然災害、不作などのリスクは未経験者でも想像できると思いますが、農作業中の事故は、農作業の現場を知らないと想像しにくいですね。例えば刈払機を使う場合、一見何もしなさそうな草むらでも、小石や固い枝や異物が隠れていることがあります。それらが高速で回転する刃に当たると、跳ね返って顔や目に当たり、けがをする恐れがあります。「ちょっとぐらいなら大丈夫」と思いがちですが、そういった見立ては危険のもとです。農作業経験者であっても、一つイレギュラーなことが起きると、心の余裕がなくなり、事故につながることも。事故やケガも、起こりうるリスクとして、常に自分ゴトとして当事者意識を持つことが肝心です。

やりがいも可能性も大きい農業ですが、どんな仕事でもリスクはつきもの。農業未経験の方も、農作業の事故やけがのリスクを情報として知っておくだけでずいぶん違います。私も刈払機の農作業事故体験VRを体験したことがあり、実際にケガが起こる様子を見て怖さを実感し、それ以来、家庭菜園であっても刃物を扱うときにすごく意識するようになりました。農業に関心がある方は、農作業中の事故についても、情報収集をしてみたいはいかがでしょうか。



小谷 あゆみ（こたに・あゆみ）さん

石川テレビ放送アナウンサーを経て、2003年からフリーアナウンサー、エッセイスト、農業ジャーナリストとして活動。

石川テレビの局アナ時代、番組企画をきっかけに始めた家庭菜園をライフワークに【ベジアナ】として活動。世田谷の体験農園で野菜づくりを実践、農業番組リポーター、ラジオ番組パーソナリティとして「農」のある都市生活を提唱。食と農業について執筆・講演多数。NHK Eテレ「ハートネットTV 介護百人一首」で2021年まで司会を担当。

▶ベジアナあゆの野菜畑チャンネル <https://ameblo.jp/ayumimaru1155/>